

六七日

むなぬか

風邪で二日ほど休んだ子が、熱も下がったので元気に幼稚園の通園バスに乗り込んでいきました。町角で見送って家に帰ったお母さんは、家事にとりかかりましたが、子供のことが心配で気が気ではありません。手は動かしていても、心は幼稚園の子供のもとに飛んでいます。また熱を出したのではないか、倒れて医務室へ運ばれてはいないだろうか……電話のベルが鳴ると、思わずギクリとして、幼稚園からではないとわかると、ほっと胸をなでおろすのです。けれども、子供にとっては、そんなことはわかりませんから、幼稚園から帰って、病後の

体に異常がなかったかをしつこくたずね

大悲無倦

る母親に、面倒くさそうにナマ返事をするのが関の山です。

煩惱障眼雖不見、大悲無倦常照我

—— 煩惱に眼を障えられて見たてまつ

らずと雖も、大悲(は)倦きことなくて常

に我を照らしたまう—— 私たちは、あら

ゆる欲望を切り離して生きてゆけません。もっ

と欲しい、もっと欲しいという思いがバネになって、生活を向上させ

ていると言えます。そういう目先の欲望のために、真実への視界がさえ

ぎられているのが人間です。だからこそ、み仏は私たちの目には見え

ませんが、常に私たちを照らして下さっているのです。

